

援助交際女性の類型論*

——援助交際の社会学②——

圓 田 浩 二**

はじめに

本稿は、前号に掲載した論文「援助交際というコミュニケーション」の続編に該当する。前号の論文では、独自に取材したインタビューをもとに援助交際という社会現象を、コミュニケーション論的に分析した。今回は、前回十分に検討・分析することのできなかつた問題を取り上げる。それは、援助交際というコミュニケーションに参入してくる女性における類型化の問題である。

前回の論文と本稿において前提としていることは、まず援助交際を売春的行為としてとらえた上で、その差異を明確に把握している点である。その差異とは、匿名性の保持、第三者の不在、援助交際において男性側よりも女性側により多くの選択肢を与えられているという女性の優位性の三点である。従って「女性が売春に入るのは男がさまざまな手段を使って強制するからだ」という立場から「その手段は、仕事を世話するとだましたり、結婚、愛やヒモにたいする忠誠心という「見えない隷属状態」から、誘拐や拘禁にいたるまでさまざまなである」[Truong 1990=1993 p.33]というこれまでの売春研究が依拠してきた立場を全くとっていないということである。

前回の論文では、援助交際女性にどのようなタイプが存在しているのかという類型論をふまえていなかったため、読者にとって援助交際女性が援助交際というコミュニケーションに何を求めているかで混乱が生じたと考えられる。類型論によって示されるタイプごとに、女性たちが援助交際に求めるものも異なっている。従って、援助交際と

いうコミュニケーションへの、援助交際を行う女性に関する動機—帰結に関する分析を行う。つまり本稿では、彼女たちが援助交際に求めるものと、援助交際の結果として得たものを考察することで、援助交際女性の類型論を呈示する。「社会学は、類型概念を構成し、現象の一般規則を求めるものである」[Weber 1922=1972 p.31]と記述したウェーバーに従って、援助交際という社会現象における理想型としての類型概念を構成する。この操作によって「純粹類型（理想型）から出発して初めて、具体的ケースの社会学的解明は可能になる」[Weber 1922=1972 p.33]ことをめざす。論文の構成は従って、まず調査の概要を述べ、次に調査から得られたデータをもとに純粹類型を構成し、そしてその類型と他の類型との比較を行う。そしてこの分析によって得られた考察は、初めにこれまでの売買春調査報告や援助交際研究と、次に類型の一般化を目指すために不倫の類型と比較研究されることで、「援助交際」という現代日本社会で誕生した新しい性に関するコミュニケーションのもつ独自性をくっきりと浮かび上がらせるだろう。

1. 調査概要

援助交際の調査は1997年の5月から現在も継続して行われている。今回の論文では、1998年の10月31日までに収集した調査データ50件を用いる。このうち面接インタビューは31件であり、残りの19件は電話インタビューである。また類型論ではデータ件数ではなく人数による分類を行うので、インタビューの人数はこの50件のうち39人とな

*キーワード：類型論、比較研究、一般化

**関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程